

最近、よく考えること

立教大学大学院
星野 友里



団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が急がれています。そこで2011年、その「住まい」の部分を担当するものとして、「高齢者の居住の安定確保に関する法律」の改正により「サービス付き高齢者向け住宅」（以下、サ高住）が作られました。しかし、サ高住の死亡以外の退居理由を見ると、「医療的ケアニーズの高まり」（43.8%）のほか、「要介護状態の進行による身体状況の悪化」（24.4%）や「認知症の進行による周辺症状の悪化」（22.7%）など、心身状態の重度化による退去理由が多くなっており¹⁾、仮にサ高住に移り住んだとしても、そこで最期まで暮らし続けるのは難しいとかがえます。

それでもなお、自宅にはもう居られないと、何らかの施設あるいは高齢者住宅への入居を希望する高齢者とその家族が多いのも事実であり、有料老人ホームやサ高住に経済的な理由で入居できない人は「無届け介護ハウス」を選ばざるを得ない状況にあります。とはいえ、制度化された住まい（方）ではないという点では、グループリビングもある種、それに似た性質を持つものです。グループリビングとは実に捉えがたい概念であり、例えば、「グループリビングとは他人同士が集まって住むことである」と広く解釈する人もいれば、「COCO湘南台のような形こそがグループリビングである」とする人もいて、数え方によってグループリビングの数は一にも百にも、それ以上にもなります。そのため、「グループリビング」と名の付いた有料老人ホームやサ高住、さらには、先述のような無届け介護ハウスさえも併存しているのが実情で、その質は決して一定とはいえません。これに対し、一部の劣悪なそれとグループリビング運営協議会の掲げるグループリビングは異なるという立場を取るのであれば、ここで一度「グループリビングとは何か」という根源的な問いが改めて議論されることに期待します。

1) 全国有料老人ホーム協会（2014）『有料老人ホーム・サービス付き高齢者住宅に関する実態調査研究事業報告書』

福祉事業に携わって

アルスタウン
白崎邦彦



私は、長年地域のまちづくりに関わっているうちに高齢者問題を考えるようになり、60歳になってアルスタウンという高齢者住宅を建てました。最終目的は、地域の高齢者への支援を進めていく事です。私の知人や福祉事業の人たちに意見やアドバイスを頂く検討会を開きながら開館にこぎ着けました。

開館して2年経過していますが、初めに想像していた事柄と実態とに少しずれが生じてきています。当アルスタウンの入居者の平均年齢が86歳と高齢化しての入居です。心身共に問題を抱えている方が多く、以前見聞きしていた事と随分食い違いが生じています。大抵はここで一生を終えたいと入られる方が多いのですが、心身共に大変になり24時間対応に迫られ、やむなく退去せざる終えない状況が結構多くなっています。高齢者住宅の限界を感じています。

私は、人生生きがいをもつことが大切な事と思って、開館する前から色々な考えを巡らせて実践しています。

私は、人との関わりがもっとも重要と考えて「アルス倶楽部」を開館と同時に立ち上げました。会員構成はアルスタウンの住人と、周辺地域の人も現在25人程の会員登録があります。アルス倶楽部は、毎週土曜日12時から13時までの例会を基本にしています。皆さんと昼食をとり、その後ボランティアによる催しを楽しみます。毎回20人程度の方が集まってきます。毎週する事で人との関わりを多くすることを考えました。またアルス倶楽部では、年間の行事を、工夫を凝らしながら開催しています。例えば、ひな祭り、花見、夏祭り、秋刀魚祭り、紅葉狩り、クリスマス忘年会などです。またプロ歌手を呼んでの音楽ライブも開催しています。このライブは倶楽部会員以外の人も参加して、大きい輪を広げていきたいと思っています。

今年から「地域の高齢者の安心、安全、健康、生きがいを考える」というお酒を飲みながらの夜間例会(月1回)の「平和の森会議」を立ち上げた。参加者はアルス倶楽部会員と地域の方たちが中心です。地域高齢者の福祉事業のまちづくりです。

2014年度グループリビング訪問記

自由な暮らし。自分らしく、ともに住まう。

完成しました！

今年度はグループリビングモーニングとグループリビングCOCO結いのき・花沢の特集になっています。グループリビング運営協議会の会員が実際に2泊3日滞在して取材し、訪問記を書いています。

昨年の訪問記が好評です。追加をご希望の方は事務局 土井原までご連絡ください。

グループリビング運営協議会の活動と 見えてきた課題

慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員

土井原奈津江

(住宅会議 93 号・2015 年 2 月 28 日

発行に掲載されたものです。)



グループリビング運営協議会とは

グループリビング運営協議会は、グループリビング運営者や運営者をめざす団体、個人の相互支援、相互啓発とともに、全国に向けてグループリビングの普及啓発活動、調査研究等を行い、我が国における豊かな高齢者居住の推進に寄与することを目的として、2012 年に設立された。現在、正会員（団体）16、正会員（個人）16、賛助会員（団体）2、賛助会員（個人）2、学生会員 2 という小さな団体である。正会員（団体）16 のうち 12 はグループリビングの運営者であり、また 12 のうち 10 はグループリビングのプロトタイプとも言える COCO 湘南台に準拠して建てられたものである。

グループリビングは制度によらずにスタートした居住スタイルであり、現在も制度的位置づけがない。また運営者の既存事業や地域性は様々であるため、試行錯誤で運営しており、それぞれに課題を抱えている。協議会は、グループリビングをより良いものにしていこうという意思を持つ運営者が中心になって、お互いに知恵を出し合い、問題解決や情報共有を行うことを第一義的な目的としているが、同時にそこで得られた成果を社会的に発信し、これからグループリビングを作りたい法人や個人への支援も行っている。高齢者の「もう一つの住まい方」を模索しつづけるというミッションを持った団体である。

グループリビング運営協議会の経緯と活動

グループリビングという名称を用いた住まい方を定着させたのは、1999 年に COCO 湘南台を立ち上げた西條節子さんである。西條さんは、「自立と共生」という理念を掲げ、居住者（生活者）が相互に、また地域の人々と共生しながら、尊厳をもった自分らしい暮らしを実現することをめざした。

財団法人 JKA はこうした COCO 湘南台の暮らしの先進性に着目し、2005 年度から「高齢者生活共同運営住宅（通称：高齢者生き生きグループリビング）」補助事業を開始し、グループリビングの社会的普及を支援し、2012 年度の終了までに日本全国で 16 件のグループリビングができた。また補助事業以外でも COCO 湘南台に学んだ NPO 法人グループリビング川崎による COCO 宮内等が作られている。

JKA 補助によってグループリビングの建物は整備されたが、どのように運営すればよいのか、各グループリビングでの試行錯誤が続いた。JKA は運営が軌道に乗るまで NPO 法人 COCO 湘南にグループリビング運営支援を要請し、2008 年から 3 年間、補助事業「全国高齢者生き生きグループリビング支援事業」が実施された。この事業のなかで、グループリビングの情報発信のため

のHP運営、登別におけるグループリビングの視察と組み合わせたワークショップの開催、グループリビング運営者のネットワーク構築などが進められた。

この3年間の経験によってグループリビング運営者の相互支援の必要性が一層認識されるようになり、グループリビング運営協議会の設立につながった。会員法人が持ち回りで補助事業等の事業主体を担い、活動のための補助金申請を行いながら、継続的にワークショップを開催することを中心に活動が展開された。2012～2013年度は北海道登別市のNPO法人いぶりたすけ愛が事業主体となり、JKA補助「お年寄りが幸せに暮らせる社会を創る活動」枠から支援を得て、グループリビングの相互支援、啓蒙普及活動を担当した。

この活動では、各地のグループリビングに集い、地元の方たちと一緒にワークショップと見学会を行い、地元の方たちにもグループリビングへの理解を深めていただくとともに、協議会メンバーは各地の現場から学ぶということテーマとした。具体的には、神奈川県横浜市、川崎市、埼玉県新座市、兵庫県高砂市、北海道北見市で見学会とワークショップを開催し、その成果を「訪問記」として冊子にまとめ頒布している。2014度は福島県福島市の社会福祉法人福島福祉会が事業主体となり、独立行政法人福祉医療機構（WAM）社会福祉助成事業の資金を得て、福島と山形でワークショップを開催した。この成果も「訪問記」としてまとめる予定である。

活動を通しての課題認識とそれに対する対応

協議会の活動を通して、グループリビングに関する以下のような課題と対応の方向性が見えてきた。

1. グループリビングの住まい方に対する認識が低いことである。COCO湘南台をベースに作られたグループリビングは、コミュニティの中の様々な資源による食事・清掃・健康維持等に関する基礎的生活サービスを居住者が共同で購入しながら、安心して自立した暮らしを目指す住まい方であり、「ケアを受けるための集住」ではない。しかし、「高齢者が集まって住むところ」であり「グループホーム」と名称が似ているところから、「自立と共生」の居住スタイルというものが一般の人々にも介護関係者にも十分に理解されているとは言えない。地域に積極的に情報発信していく事が求められる。
2. グループリビングの居住者の高齢化に伴うケアニーズの増大が問題になっている。グループリビングは「ケアを受けるための集住」ではないが、居住者のケアニーズの増大を無視することはできない。「自立と共生」という理念のもとでケアの仕組みをどのように作っていくかは大きな課題である。運営者は居住者のニーズにあったサービスを選択できるように、地域資源についての情報や連携体制をコーディネートしていくことが必要である。一方で、自立という点では居住者が自分でマネジメントできるような姿勢や知識を身につけるための支援も求められる。
3. グループリビングは少人数であるがゆえに居住者の入れ替わりという環境の変化が運営に大きな影響を与える可能性がある。居住者一人ひとりが居住者同士の関係性に多くを依存していると変化の影響は大きい。それぞれが地域に暮らす一員であるという側面が強まれば、居住者が入れ替わっても、各人にとっての暮らしの安定性は持続的でありうる。地域との交流に配慮し、居住者のコミュニケーション環境を豊かにすることが地域の一員になることを助けることに着目し、多くの趣味活動の機会を提供するなど、居住者が地域の人々と多様なつながりを作る環境を用意することが重要である。

4. 暮らしに対する意向反映はグループリビングで最も重要な点の一つである。運営者は事業採算性と居住者の意向反映のバランスを取りながら、グループリビングの日々の生活を組み立てていくことが求められる。グループリビングの暮らしは、居住者自らが主体的につくっていくものという自覚、意識が高まっていかないと、運営者におまかせの高齢者施設型になっていくおそれがある。常に暮らし方について考える機会や居住者が積極的に情報を得られるような環境、さらに居住者が自分たちの体験を交換しあう場が必要だと思われる。

上記の課題に応えるため、グループリビング運営協議会はワークショップや会員のネットワークの中で情報提供や問題解決を行っている。また成果をHPで社会に向けて発信している。ワークショップでは実際のグループリビングを見学しながら、運営者、居住者、生活支援事業者、地域住民などに参加してもらい意見交換するスタイルをとっている。開設後入居率の低迷していたグループリビングがワークショップ後満室になるなど、ワークショップが地域の理解を促したと考えられる成果もでてきている。

また昨年から作り始めた「訪問記」が好評である。ワークショップの開催地のグループリビングを会員が訪問し、実際に3日間滞在し、記事を書いている。また住まいの概要や居住者の家計簿、建築図面などを掲載し、誰にでもわかりやすく、しかも詳細に伝えられるような内容になっている。この訪問記のタイトルである「自由な暮らし。自分らしく、ともに住もう。」が、協議会会員の間で、グループリビングの暮らしの理念の新しい表現として認識されるようになっている。

広報からのお知らせ

グループリビングについて公開したい情報等ありましたら、事務局（土井原）までご連絡ください。メールや会報、HPを通して会員の皆様にお知らせいたします。

ホームページのお知らせ

「東北にグループリビングの暮らしを - 自由な暮らし。自分らしく、ともに住もう。」
福島・米沢ワークショップの報告書と訪問記をアップしました。

<http://www.group-living.org/>

貴法人のHPにぜひリンクをお願いいたします。

グループリビング運営協議会

会員募集中

関係者をお誘いください！



高齢者グループリビング普及啓蒙活動が終了しました。

- ① 活動目的 被災地に向けて独居高齢者の孤立を防ぎ、生活の質を上げ、地域の繋がりを促進するグループリビングの普及させるため、見学会を兼ねたワークショップを行うことを目的としました。
- ② 事業内容
 - 1) 実行委員会の開催 年 1 回 委員構成 10 名
 - 2) 具体的内容 福島・米沢ワークショップの開催
開催日 平成 26 年 11 月 15 日、16 日
場所 福島県福島市 見学会：グループリビングモーニング(社会福祉法人福島福祉会)
ワークショップ：パルセ飯坂
山形県米沢市 見学会：グループリビング COCO 結いのき・花沢(NPO 法人結いのき)
ワークショップ：置賜総合文化センター
 - 3) 成果物 報告書 400 部、訪問記 1,000 部(見学地の概要等)、
ホームページ(<http://www.group-living.org/>)
- ③ 事業の具体的な成果
 - ・見学会で実際のグループリビングを見学しながら、運営者と居住者の話を聞き、ワークショップにおいては運営者の経験知や研究者の知見について学び、座談会では意見交換の中で、疑問点を解決することで、グループリビングの運営や暮らし方について、地域住民に理解していただく機会となり、普及に向けての一步を踏み出すことが出来ました。
 - ・グループリビングを普及させたいという同じ目的を持つ全国のグループリビング運営者が連携し、共催したことは、お互いに情報交換をする機会が出来るとともに繋がりをより一層強くすることができました。
- ④ 普及方法
報告書、訪問記を行政や介護福祉事業所、地域住民などに配布するとともに、HP にグループリビングについての基礎情報や報告書、訪問記を掲載し、誰でも見ることが出来るような体制をつくりました。

メディア情報

2 月 28 日 住宅会議 93 号(2015 年 2 月発行)に「グループリビング運営協議会の活動と見えてきた課題」(慶應義塾大学 SFC 研究所 土井原奈津江)が掲載されました。

編集後記

平成 26 年度社会福祉振興助成事業が無事終わりました。お蔭様で充実した事業になりました。事業主体の社会福祉法人福島福祉会様、ワークショップを開催地 NPO 法人結いのき様、講師の皆様、ワークショップのサポーターの方々、訪問記の記者の方々、グループリビング運営協議会会員の皆様、本当にありがとうございました。(な)

編集委員 土井原奈津江 星野友里